

ギリシア東方の歴史地理―オスマン正教徒の小アジア・カフカース表象

藤波 伸嘉

はじめに

近代歴史学の発展はしばしば国民形成と不即不離の形で論じられる。それは民族の歴史の舞台を形作る一定の地理認識を伴い、そこで設定された時空間が、公教育その他の媒体を通じて国民統合促進の手段となる。こうした図式はトルコ史やギリシア史の文脈でも広く共有され、前者では、多民族多宗教的な「オスマン国民」の不可能性の認識が「トルコ」意識の「覚醒」をもたらすと、それが排外的で自民族中心的な公定歴史学の構築に繋がったとされる [Ersanli 2003]。後者では、ギリシア王国の成立以降、民族の広がりや国家の領域と一致させるべく、オスマンの犠牲の下に自国の拡大を図る「メガリ・イデア」、即ち「偉大なる理念」が国是となる中、暗黒の「トルコ支配」を挟んで単線的に

史苑（第七四卷第二号）

「古典古代、中世ビザンツ、近代ギリシアの三段階を結ぶ民族史学が確立したと論じられる」[石田一九八二]。

だがこの図式が二〇世紀初頭の歴史叙述の全てを説明する訳ではない。オスマン人ムスリムは普遍宗教たるイスラームの盟主を自負し続けたし、正教会、とりわけイスタンブルに所在する世界総主教座は、全キリスト者の糾合を鼓舞するその従来のエキュメニズムを保持し続けた。ただし、民族意識の浸透の中、この両普遍宗教をオスマン帝国で担った支配層が、それぞれトルコ人やギリシア人と同一視されていくに従い、現存するオスマン国制は、非トルコ系ムスリムには「トルコ支配」、非ギリシア系正教徒には「ギリシア支配」として、あるべき真に普遍的な時空間の篡奪と映るようになっていった。とはいえ、例えそれらが後に一民族一国家式の個別の民族史観に合流したのは事

実でも、二〇世紀初頭のオスマン内外の歴史叙述が、当初からそれを自明の枠組みとしていた訳ではない。旧来の普遍宗教を共有する域内の諸民族にとつて、記されるべき歴史事象は往々にして隣接する他者と重複したのであり、結果として歴史叙述は、諸集団が共有する時空間をめぐる、自らの独自性を如何に他者より整合的な形で提示するかというゲームとして現れた〔Stamatopoulos 2009, 藤波二〇一三〕。

本稿は、以上の点を踏まえ、オスマン正教徒知識人の著作の分析を通じて、二〇世紀初頭オスマン領内外の歴史地理認識の一端を明らかにすることを目的とする。この作業を通じ、ロシア革命前後の時代の歴史叙述という問題を考えるための新たな視座を提起したい。

一、帝国の時代の正教徒

オスマン帝国とギリシア人

一八三〇年代にギリシア人の民族国家、ギリシア王国が誕生した後も、オスマン帝国がその正教徒臣民を全て失った訳ではない。これ以降、主権国家としてのオスマン領は縮小を続けたが、二〇世紀初頭に至るまで、オスマン帝国はギリシア王国のそれ以上の数の正教徒臣民を抱えてい

た。また、一八世紀末から発展した環黒海・地中海の通商網を背景に、ギリシア以上にオスマン側の市場こそが正教徒の経済的成長を支え、世界総主教座は、その彼らに精神的な拠り所を提供し続けていた。そして一八五六年の改革勅令、六二年の総主教座法、更に七六年の憲法を経て、オスマン国制における正教徒の地位は顕著に向上する。こうした中、総主教座界限の正教徒共同体指導層にとつて、自らの既得権益保持のためには、民族国家への分裂よりも、宗派帰属を重視する帝国の枠組みを保持する方が望ましかったのであり、彼らは、オスマン領の縮小に伴う自らの管区の縮小には強く抵抗した。故に、例えギリシア王国側にはオスマン正教徒をメガリ・イデアの単なる客体と見做す傾向があるうとも、また実際に王国側の領土拡張の論理に端を発する衝突が何度か起きながらも、「長い一九世紀」を通じ、少なからぬ正教徒にとつて、オスマン帝国という枠組みは必ずしも否定されるべきものではなかった。それほどころか、ロシア、セルビア、ブルガリアというスラヴ系の敵対者が、世俗的にはオスマン領の分割を狙う一方、宗教的には世界総主教座からの独立を図り、正教会の一体性を掘り崩そうとしていると考えた正教徒共同体指導層にとり、オスマン帝国の枠組みは、「汎スラヴ主義」と闘うためににも有意義な存在と映っていた〔藤波二〇一四b〕。

こうした環境の下、ギリシア王国と世界総主教座というギリシア人の二つの「中心」は、ギリシア世界の将来像をめぐって、思想的にも政治的にもしばしば衝突した。[Kofos 1986]、その双方にとり、主敵たる「汎スラヴ主義」との対峙を歴史叙述の場で遂行するためにも、現実の国境線には関わらず、環黒海・地中海諸地域を包含する広域的な地理的枠組みが必要だった。故に歴史地理認識は、いわば政治的な覇権争いの代替物として、オスマン・ギリシア両国の多様な行為主体の間で、一種の思想的角逐の下にあった。しかしその一方で王国側では、その領土拡張主義的な国是にも拘らず、自らの現有領土に歴史的想像力が局限されがちであり、一部の職業的歴史家の主張にも拘らず、自領外である小アジアなりカフカースなりを有機的に組み込んだ歴史地理教育は実現しなかった [Koulouri 1991, Chapter V]。他方、親オスマン的なエキュメニズムを奉じたイスタンブルの正教徒名望家たちは、帝国の枠組みの下、「三千年」の歴史を持ち、正教会と純正語とを軸とする「祖国」の表象の浸透に努めていた [Kertzoglou 1996]。本稿で扱う三名も、こうした文脈の中で活動した人々である。

カルフォール、カロリデイ、スキヤリエリ

その一人目がイオアンニス・カルフォール（一八七一—一九三一年）である。彼は、オスマン領のカツパドキアから黒海沿岸サムスン近郊のバフラに移住した家系の出身であり、上京した両親の下、イスタンブルで生まれた。一八九〇年には父祖の地、カイセリのロドカナキ神学校を卒業し（同校はその名称にも拘らず神学校ではなく、彼も聖職者ではなく俗人である）、九二年からはギリシア文字トルコ語の最大紙、『アナトリア』で健筆を振るった。創刊者ミサイリデイスの死後、彼は九五年より同紙編集長となるが、一九〇一年にはロシア領バトウームに移住して、煙草商に従事した。彼はこの間、まず一八九八年から翌年にかけて、母校の置かれた修道院の縁起として、『ズインジデレ村の前駆授洗イオアンニス修道院あるいはフラヴィア修道院』全五巻をギリシア文字トルコ語で刊行すると、九九年には『小アジア歴史地理』をやはりギリシア文字トルコ語で著した。その後、未完に終わった『小アジア史』の試みを経て、一九〇八年に『カフカースのギリシア人』を、更に一八年には『バトウームのギリシア人共同体の歴史』を、それぞれギリシア語で刊行した。

二人目はバヴロ・カロリデイ（一八四九—一九三〇年）である。やはりカツパドキア出身の彼は、イスタンブル、

ギリシア東方の歴史地理―オスマン正教徒の小アジア・カフカース表象（藤波）

イズミル、アテネで学んだ後、ドイツ留学を経て一八九三年にアテネ大学の歴史学教授に就任するが、その後もオスマン・ギリシア両国を股にかける政治・言論活動を繰り広げた。そして三人目は、かつてオスマン・ギリシア二重帝国を夢見てムラト五世をフリーメイソンに誘ったイスタンブールの銀行家、クレアンシス・スキヤリエリの子で、自らもオスマン政界で活躍した人物、ヨルギ・スキヤリエリ（生没年不明）である。

活動の舞台や志向を異にするこの三名ではあるが、彼らには、トルコ語を母語ないし準母語とし、人生の少なからぬ時期をオスマン領で過ごしたという共通点があった。その意味で、この三名の比較を通じて、正教徒知識人の歴史地理認識を、その共通性と独自性、更にそのオスマンの歴史脈を踏まえて、より深く検討することができるのではないかと考えられる。

二、祖国の表象

愛すべき「祖国」

小アジアあるいはアナトリアは、必ずしも明確な単一の行政的単位を成した訳ではない。近世を通じ、以下に見る「小アジア」は、西のアナトリア州 *Anadolu Eyaleti*、東

のローマ州 *Rum Eyaleti*、そして南のカラマン州という広域州に分割されていたが、タンズイマートに前後して、その各々が更に複数の小規模州に分割された。一九世紀の当時、西欧学知を踏まえ、ヨーロッパ、アジア、アフリカの三つにオスマン領を分類するのが一般的だったが、帝国全土を「祖国」とすべきオスマン人、とりわけそのムスリム臣民にとり、その一部を成すに過ぎないアナトリアは、必ずしも特権的な領域ではなかった。ただ、一九世紀末から成長したトルコ民族主義の言説において、中央アジアの「故地」との一体感が高まると、それが法制的枠組みを伴うことはなかったとはいえ、その過程で、身近な「祖国」アナトリアへの意識も徐々に呼び覚まされる [Kushner 1977]。同様の経緯は、正教徒についても観察された。元来この領域は世界総主教座とアンティオキア総主教座とに分割されていたが、黒海や地中海を股にかけるギリシア世界、即ち「我らが東方 *ἡ καθ' ἡμᾶς Ἀνατολή*」の意識が広まる中、その一部として小アジアへの視線も変化する。例えば、カロリデイがストラボン『地理書』の小アジア関係部分の註釈を行なったのは、帝都で活躍するカイセリ出身の一篤志家から、「小アジアの広大な祖国 *πατρίδος* の精神的再生や、古来ギリシア的であったこの半島におけるギリシア人の発展拡大に貢献する」意図の許、「特に小ア

ジアのギリシア人学生の使用に供すべく、その刊行を依頼されたためであった [Karolidis 1889, p. e.]。

カルフォールも「祖国」に対するこのような眼差しを踏襲しており、『小アジア歴史地理』は次の文で始まっている。

「国土 *μητρίδα*！なんと美しい単語か！なんと気高い言葉か！なんと偉大な言語か。そして国土への愛！これよりも大きな美德、これよりも偉大な志や目的など存在しない。

「我々の中には、自分たちの祖国 *Βατράνη* とは何であるかを知らずに、『アナトリア出身者である』と言うのを恥じる者がいる！」「我々は、その下で生きている至高の国家の歴史を知らない。オスマン史を学ばない。同様に、我々がアナトリアの歴史はかつてどのようなものだったのか全く分かっていない」と [Kalfoglous 1899b, pp. 5-7]。

即ち、「アナトリア出身者」たることは恥ずかしいものと考えられているという認識を前提に、愛すべき「祖国」たる小アジアに関する知識をそれとなく「我々」に与えることで、こうした状況を変えようとするのが本書執筆の目的である。この際、本書の言語からも内容からも、そこで想定される「我々」が、オスマン臣民たるトルコ語話者のアナトリア出身正教徒なのは明らかである。これは、当時も今もしばしば「カラマンル」と称される人々だが、実際「カラマンル」とは自称ならぬ他称であり、寧ろ蔑称に近

い言辞だった [Benlisyoy and Benlisyoy 2010]。

さて、その『小アジア歴史地理』でのカルフォールの議論は専らオスマン行政区画に即して行なわれ、そのことが、「祖国」の範囲設定自体にも影響を及ぼしていた。即ち、彼のいわゆる「小アジア」は、「北は黒海、西及び南は地中海、そして東は、ユーフラテス河並びにシリア州をチュクロヴァ及びカッパドキアから隔てるアマノス山（アルマ山）」によって区切られる筈なのだが、本書末尾で、「小アジアにある州は以上で全てである。東側については、アンカラ州の東にあるアレツポ州及びディヤルバクル州の西側の一部は小アジアに含まれるが、その町は重要ではないので、ここでは無視することにした」と記されるように、本来は小アジアに含まれる筈の地域が、現行の州県境との齟齬のため、捨象されてしまっている [Kalfoglous 1899b, pp. 9-10, 158]。

ただ、この範囲設定自体は、当時の正教徒にとって一般的なものではあった。カロリディも、そのストラボン註釈において、今日では皆が、「ユーフラテス河とエーゲ海、黒海と地中海、トラブゾン地域とイシコス湾、タウラス山脈の一部とアマノス山の間広がる半島」を小アジアと呼んでいると記す。彼によれば、「小アジア」の名称自体はローマ人からの輸入だが、アジアを二分する地理認識はへ

ロドトスやアレクサンドロス大王など古代ギリシア人にも見られ、ヘレニズム時代には既に現在の「小アジア」に近い領域が一つの地理区分として認識されていた。そしてそれは、「地理的にのみならず、歴史的にも民族誌的にも言語学的にも正しいものだった。というのも、この地域は歴史的にアジア側のギリシアだったからである。この境界の内側には古来、ギリシア人の先祖たる純粋なアーリア人が住んでいた」とされ、この点は、「今世紀最大の地理学者」カール・リッターの説が引き合いに出されることで補強される。カロリデイは更に、アレクサンドロスやビザンツの時代、ギリシア人の勢力はその遙か先まで届いてはいたが、正にこの「小アジア」の範囲までが「大ギリシア」を形成する領域だったのであり、しかもそのギリシア性は、「東ローマ帝国がギリシア帝国と化した後」も、征服者たるアラブ人との対峙の中で強化されたのだと説く [Karolidis 1889, pp.46-47]。ハントは「近代地理学の父」、リッターが召喚されるのは偶然ではない。自然環境と人文地理の連関を重視する彼の議論は、当時のギリシア人に広く浸透していった [Kouliouri 1991, Chapter IV]。

人種と民族

そしてアーリア人への言及にも西欧学知の成果が顕著で

ある。カロリデイは既にストラボン註釈に先立ち、『アーリア同族の小アジア人に関する覚書』なる著作でこの問題を本格的に展開していた。本書で彼は、聖書学を東洋学と重ね合わせ、創世記に現れるヤペテの子ゴメルには、南ロシアからカフカースに移住し、後に小アジアに定着したキンメリア人の像が反映されていると説く。そして、「先史時代に半島各地に居住したトゥラン系、セム系、フス系の諸民族に先立ち、小アジアにはアーリア人種に属する多くの民族が住んでいた。フリギアIIペラスギ系の小アジア人を形成したこの諸民族は、（特に言語学的観点から言えば）あらゆるアーリア民族と縁戚関係を持つ特徴を有し、東方（特にイラン高原やアルメニア高原）のアーリア人とイタリヤIIペラスギ人とを結び付け」る存在だったとされる [Karolidis 1886, pp.7-28, 91-92]。だが彼において、人種の起源が無媒介に現在の民族構成と結び付く訳ではない。何故なら、「人種 φυλή や人種的結び付きとは自然的要素であるのに対し、民族 έθνος や民族的結び付きとは倫理的な要素や力であって、それは人間生活の長い歴史の中で実現し表出する。人種の民族や民族性への変容は、自然生活が歴史へと変容することで、即ち人々が精神生活や文明に親しむことで実現する。民族は一つの人種からも形成され得るし、あるいは互いに関係を持ったり持たなかつ

たりする複数の人種が、歴史的觀念の一体性、生活や文明、そして歴史や文明を介して生成され周知された精神的記憶の一体性を通じて同化されることによっても形成される」からだった [Karolidis 1909, pp.387-388]。

このように民族性の決定要因が人種起源以上に精神生活に置かれることは、オスマン統治下、「東方」のギリシア正教徒の一体性を誇示する上で決定的な意味を持つ。というのも、正教徒の精神生活においては正教が常にその中核的位置を占めるのだが、その際、正教こそギリシア性の中核であって、またその文明語はギリシア語であるが故に、彼らは皆ギリシア人と見做されることになるからである。従って、例えオスマン治下の正教徒の一部がアラビア語やトルコ語やブルガリア語を母語とし、それ故に仮に当人が言語別の帰属意識を有していたとしても、それは俗語に基づく仮初の認識に過ぎず、正教徒である限り、彼らはすべてからくギリシア人と見做されることになった。これは、言語を根拠に現地住民をギリシア人聖職者から離間しようとしたロシアのパレスチナ政策やブルガリアのマケドニア進出、即ち「汎スラヴ主義」の脅威に対抗するためには、必須の主張だった [Karolidis 1909, pp.29-41]。

そして先史への眼差しは、カロリディイをしてスカンディナヴィアのキンプリ人と小アジアのキンメリア人とを同一

視せしめ、これらのアーリア民族が居住した両地域の交流こそが、ロシアの揺籃たるキエフ・ルーシ登場の前提だと目される [Karolidis, 1890, pp.151-170]。こうして人類史上におけるロシアの位置を相対化したカロリディイは、他方で、古典古代におけるアレクサンドロス大王の征服行こそギリシア史上の画期だとする。彼によれば、大王以降のギリシア文明の拡大は、その後継者たるヘレニズム諸王朝の時代に定着し、更に、ローマ帝国以降のキリスト教の浸透によって、現在に至る普遍性を獲得したとされる。シリア、アナトリア、マケドニアに文明が到達したのもこの時代であり、故にこれらの地は、正教を軸にそれを実現したギリシア人の地なのだと思われ [Karolidis 1909, pp.50-69, 124ff]。

従って、「祖国」小アジアは、それを包み込む広大なギリシア世界の一部として理解される。このように、ギリシア王国の現有領土や世界総主教座の管区を遙かに超える広がりを持つ彼の文明論的な視座の下では、正教会の管区やオスマン行政区画との異同といった論点の意義は矮小化される。つまり、カロリディイの史観は既に脱宗教化を経たものであって、その上で改めて正教徒という属性が、ギリシア世界の拡大を示すために選り取られていた。この際、人々の精神生活を通時的に跡付ける歴史学が果たすべき使命は

大きい。その意味で歴史学とは、何よりもメガリ・イデア実現のための手段なのだった。ただし彼のメガリ・イデアは、ギリシア王国の領土拡張としてではなく、現存の正教徒通商網を前提に、オスマンの枠組みの下での正教徒の経済的文化的な発展を志向するものだった点に特色がある。

断絶しない歴史

これに対しカルフオール『小アジア歴史地理』は、地理的には禁欲的なまでに小アジアにその視野を限定する一方、歴史的には、断絶のない空虚な時間の流れとして提示される点に特徴がある。本書で彼は、古代ローマやビザンツ時代の行政区画への言及は最小限、別枠で地名の列挙を簡潔に行なうに留めており、当該の地域が正教会のどの管区に属するかは必ず記されるものの、歴史や地誌に関わる本論は、あくまでオスマン行政区画に即し、現行の各州県の枠内で過去を振り返った際の情報を一律に列挙する体裁を取る。その結果、先史、古典古代、ヘレニズム諸王朝、ローマ、ビザンツ、セルジューク朝、そしてオスマン朝と、その間の歴史の流れに断絶は見出されず、その内部で生じた事象である限りは、当該の州県の事績として紹介される。例えば、アマスヤについての記述は次の通りである。

町の中心、川のほとりには故帝スルタン・バヤズイ

ト一世陛下が建設させた大きな宮殿があり、その脇にはマドラサと孤児院とがある。ポントスの支配者たちはここを気に入り、首都に選定していた。イラン人の時代にはここは第三の知事職に属していた。

ローマのポンペイオスは、ここを征服した際に城砦を破却した。ビザンツ時代や、その後トレビゾンド帝国の手に渡ってからは、ここは大変に発展した。セルジューク朝に属するダニシユメンド朝がここをコムネノス朝の手から征服したが、コンヤの سلطانに引き渡すことを余儀なくされた。その後ここはオスマン朝に移った。ここは有名な地理学者ストラボンや、イスタンブル征服後三代目の سلطان となった冷酷者セリム一世陛下の故郷 *Barva* である。立法者スルタン・スレイマン陛下は、ドイツ皇帝カール五世陛下の兄弟であるオーストリア公フェルディナンドが派遣した使節をここで引見している [Kalfoglous 1899b, p. 151]。

また、彼の『フラヴィアン修道院』補遺では、オスマン行政区画ではなく、正教会のカイセイ及びコンヤの管区の歴史地理が扱われているが、全体を貫く視座は同様であり、王朝の変遷を超えた古代以来の管区内の歴史的事象が列挙されると共に、ムスリムやアルメニア人のモスクや教会に

ついても逐一言及がなされており、多民族多宗教的で断絶のない「祖国」小アジアの歴史地理の理解に資することが目的とされていた [Kalfoglous 1899a, pp. 535-597]。

約言すれば、カルフオールにおいて、王朝の興亡はあつても、その舞台たる「祖国」の歴史に断絶はない。そして、ギリシア人なり正教徒なりが、同じ「祖国」の子たるムスリムやトルコ人、あるいはアルメニア人に比し、必ずしも特権化されている訳でもなかった。

とはいえ、カルフオールの視点は完全にオスマン化されたものだったとか、小アジアに局限されるものだったとか考えるならばそれは誤りである。彼もまた、小アジアを超える視座を有していた。バトゥーム移住後、彼はカフカースのギリシア性を論ずることになる。

三、アルゴ船の着く土地で

『カフカースのギリシア人』

一九〇八年刊行の本書では、ケルチからバトゥームに至る黒海東岸の歴史地理、特にそこに住むギリシア人の由緒が主題とされている。そして本書執筆の目的は、「ギリシア人種の純粹性」を、換言すれば、その母語の如何を問わず、「ギリシア人は常にカフカースに存在し、その純粹

性を保ってきたこと」を、それを認めない「敵」に対して反駁すべく提示することにあつた。ここで「敵」として名指しされるのが、ドイツの歴史家ファルメライアーである [Kalfoglous 1908, pp. 158-160]。この人物は、古典古代の終焉後、ギリシアの地は完全にスラヴ化し、その子孫である近代ギリシア人は古代ギリシア人とは何の繋がりもないという説を打ち出したため、古典古代との直結を存在意義とするギリシア人に衝撃を与えた。そこでこの説を批判し、古代から現在に至るギリシア人の連続性を証明すべく努めたのがカロリデイの前任者、「近代ギリシア歴史学の父」パパリゴプロスであり、近代ギリシア史学史はファルメライアー批判から始まるとしても過言ではない [Kritomilides 1998]。この課題を引き継ぐカロリデイも、パレスチナやメソポタミアのギリシア性を説く際に、ファルメライアーを名指して批判してゐた [Karolidis 1909, pp. 1-27]。

カルフオールも本書でパパリゴプロスの記念碑的著作『ギリシア民族の歴史』を頻繁に引用し、ヒザンツを専ら「ギリシア国家」として扱い、その「宗主権 *ἐπικυραρχία*」や世界総主教座の管轄をカフカース現地のギリシア性の証として、ギリシア語の使用を「ギリシア文明の影響力」の根拠として、それぞれ特記するなど [Kalfoglous 1908,

pp.26-73]、ギリシア世界全体の関心への接近が顕著だった。しかも本書は、ビザンツとオスマンの交代期、コンスタンティノープルに続きトレビズンドも陥落した一四六一年を境とする時期区分を導入しており、この点でも、歴史の断絶のない『小アジア歴史地理』とは一線を画している。

しかし、その一方でカルフオールは、世界総主教座公報『教会の真理』編集長にして近代最大の教会史家の一人、ゲデオンの著作にも頻繁な言及を行なっている。エキュメニズムに殉ずるゲデオンは思想的にパトリゴプロスの対極にあり [Stamatopoulos 2009, Chapter 1]、従って本書でのカルフオールの議論も、単純にギリシア王国の歴史叙述を再生産するものではあり得なかった。この点は、パバリゴプロスを継ぎながら、オスマン帝国がギリシア史上に有した意義を積極的に評価するカロリデイの立場とも類似する [Fujinami 2014]。

ただし、カロリデイとカルフオールの間には違いも大きい。それは、ギリシア世界の広がりの中で、小アジアとカフカースとを結び付ける様式において顕著である。カルフオールは、古代ギリシア人の入植は商業的な動機に基づいており、古代ギリシアの神話や文芸もそれを反映していると考ええる。「古代のコロンブスであるイアソンの指揮の下、アルゴ船の乗組員たちがやって来たが、彼らはカフカ

ースやアルメニアの各地で商売の旅を行ない、植民地を築き、町を建てた。アルゴ船の遠征と呼ばれるこの話は神話から持ち出されたものではあるが、これが何らかの歴史的な出来事を反映していることは誰もが認めることである」と [Kalfoglous 1908, p.10]。更に、「ギリシア人はその本性として商業や海運に適しており」、「海岸沿いに住むギリシア人植民者を通じて、彼らは現地人とも関係を築き、現地人に自分たちの産品を売ったのみならず、その文明をも運んだ」のであって、カルフオールにとり、アレクサンドロス以降のギリシア世界の拡大も、あくまで商業的進出が主であって、文明や宗教の伝播は従なのだ」と [Kalfoglous 1908, p.26]。カルフオールが、一八世紀後半以降のカフカースの動向を記すに当たり着目するのも、在地の鉱山開発や、それに付随したギリシア人鉱夫の動態だった。中でもとりわけ彼の関心を引くのは東アナトリア、特にギュムシユハーネ出身の鉱夫らを媒介とした、小アジアとカフカースとの人的かつ経済的な紐帯である。

このような紐帯は、『カフカースのギリシア人』の随所で強調されている。「今日のカフカースに住むギリシア人は、ロシア臣民であろうとなかろうと、全て小アジア出身である」。「カルス周辺の地域のギリシア人はい昨日の入植者であり、その多くがトルコに土地や財産や兄弟姉妹を

有している。「その性質においても性格においても行動においても生活様式においても、彼らと、その小アジアのギリシア人の同胞との間に、どんな小さな違いも見出すことはできなご」云 [Kalloglous 1908, pp.158-159]。つまりカルフォルの視線は、小アジアとカフカースとを往還する人々、即ち彼が「祖国」を共にする人々の生息と、その背後の社会経済的要因とに向かっていた。その結果、両地域を跨ぐ人的紐帯が紡ぎ出す、広域的なギリシア性が浮かび上がる。このような社会経済的観点、特に実体経済としての商業への関心は、実は既に『小アジア歴史地理』においても展開されていたものだった。

手引書としての歴史地理

『小アジア歴史地理』が行なうのは、住民構成や学校数、鉄道や通商網、名産品や気候等の紹介であって、いわば各州県の便覧、ないしは商業実務の手引書という趣が強い。彼の父母の地バフラが属するジャーニク県の中心地、サムシンの描写はその典型と言えよう。

主要産品である煙草のため、この商業は一〇年から一五年ほど前までは大変に発展していたが、煙草への需要が低下し、更にアンカラ鉄道の建設によって小麦やその他の農作物がここを經由しなくなった

史苑（第七四卷第二号）

ことから、商業は大変に沈滞している。ここはトカト、メルズイフォン、チョルム、スイヴァス、カイセリからの積み出し港と見做され、幹線道路で各地と結ばれている。政庁、煙草専売公社の工場や倉庫、オスマン銀行、ギリシア人学校 *Ποῦν μακρὴν* やその他様々の大変美しい家々が、街を飾り立てている。二万人ほどの人口の内、その三分の一がギリシア正教徒 *Ποῦν ὀρθόδοξος* であり、残りはムスリム、アルメニア人、イラン人、そしてヨーロッパ人である。黒海で運行するあらゆる汽船がここに寄港するため、各社の代理店が置かれており、ヨーロッパ列強諸国の領事も駐在している [Kalloglous 1899b, p.145]。

ここにも見られるように、『小アジア歴史地理』において、小アジア各地の住民構成は、民族別ではなく宗派別で記載される。この際、「ムスリム *Μουσουλμάνοι*」と「オスマン人 *Οσμανλί*」とはほぼ等価であり、ムスリム内部の民族性への言及は非常に少ない。このような用法は、近世以来、特に非ムスリムにおいて広く見られたものである。ただし、「オスマン国民」の意味でオスマン人の語が用いられることはあっても、西欧諸語やギリシア語の用法とは異なり、オスマン人ムスリムを「トルコ人」と呼ぶ用法は本書では皆無に近い。他方、近代のオスマン人ムスリムは一般

に、自国の正教徒をローマ人⇨ギリシア人 Rum と、ギリシア王国の正教徒をイオニア人⇨ギリシア人 Yunanli と呼び分けていたが [Strauss 2002]、ギリシア王国にはほぼ一切言及されない本書において、イオニア人⇨ギリシア人 Γεωργιάη は、ほぼ古典古代のギリシア人を指す場合に限定された用法となる。これに対して、カルフオール自身も含む小アジアの正教徒については、正教徒 Ορθόδοξος とローマ人⇨ギリシア人 Ρομ とが、ほぼ等価で用いられている。

また本書では住民の使用言語はほとんど示されない。明示的な言及は四例に過ぎず、『カフカースのギリシア人』で移民供給源として重視されるギュムシュハーネ県の内、「レリオンの町には二〇〇〇人のギリシア人 Ρομ が住んでおり、皆がギリシア語 Ρουμτζα を話している」という事例に見られるように、その内の三回は、ギリシア人のギリシア語使用を特記する内容である [Kalifoglous 1899b, pp. 113, 142-143, 146-147]。しばしば指摘される通り、「ギリシア語を話す」ことが特記の対象となるほど、小アジアにはトルコ語話者の正教徒が多かった [Anestidis 2002, pp. 23-24]。こうした非ギリシア語話者の多さ故に、「ギリシア人種の純粋性」を説くべき『カフカースのギリシア人』でも、カルフオールは、「カツパドキアにはトルコ語

話者の同胞がおり、アルメニアにはアルメニア語話者の同胞がおり、クルディスタンにはクルド語話者の同胞がいるように、ギリシア語を話そうと話すまいとギリシア人である人々がここにいる」と述べざるを得なく [Kalifoglous 1908, p. 160]。カロリデイ同様、カルフオールも言語が民族性の要件だとは考えないが、それは、小アジアやカフカースの現実を反映するものだった。

要するに、カルフオールの歴史地理で重視されるのは政治ではなく経済であり、現存の国境や政体などへの関心は小さい。そして、「ギリシア人種の純粋性」という題目にも拘らず、彼の視線は、排他的で単線的な領域性ではなく、跨境的な人的紐帯に向かう。こうした彼の立場は、革命と戦争とが席卷する二〇世紀初頭の一〇年間を経て変わらなかった。

四、「破局」に向かって

革命と戦争

一九〇五年以降、小アジアもカフカースも、第一次世界大戦とそれに続くロシア内戦及びトルコ・ギリシア戦争に至るまで、革命と戦争の激動の時代を経験することになる。本稿の三人の主人公の運命もまたその議論も、これらの出

来事に少なからず翻弄されていく。

一八七六年制定のオスマン帝国憲法は、翌年に勃発した露土戦争に際して事実上凍結され、以後三〇年の君主専制の時代が続いた。これを復活させるべく、統一進歩協会（以下「統一派」）を中心に展開した革命運動の結果、一九〇八年の青年トルコ革命を経て、第二次立憲政が実現する。これを受けてカロリディは、縁故の深いイズミルの街から立候補し、代議院議員としてオスマン政界に参画した。彼はその後、一貫して統一派支持の立場を守るが、それは、「汎スラヴ主義」の脅威から正教会の一体性を護るには、統一派との協調こそが唯一の道と思われたためだった。これに対しスキヤリエリは、多民族多宗教的な「東方連邦」論を掲げながらも、実際は反「汎スラヴ主義」の文脈でブルガリア人と抗争していたギリシア人の政治結社、コンスタンティノープル機構（以下、「機構」）に属し、分権論の主張者たる反統一派の領袖、サブハッティンとの個人的友誼から、ムスリムの反統一派勢力と「機構」周辺のギリシア人とを結び付ける役割を果たしていた。こうした中、親オスマンのエキメニズムを尊重するカロリディに対し、スキヤリエリは次第に世俗的なギリシア民族主義に傾斜していく。一九一〇年、クレタ出身のヴェニゼロスがギリシア首相に就任すると、彼は、スラヴ諸国との関係

改善を通じたオスマン帝国への武力侵攻、そしてそれを通じた領土拡張策に舵を切る。カロリディはこれに反対したが、スキヤリエリの属する「機構」はこれに呼応して、反統一派の立場でのブルガリアとの「和解」へと態度を転換した。こうして実現したバルカン同盟との間で行なわれた一九一二年の戦争によって、オスマン帝国がそのヨーロッパ領をほぼ失うと、ギリシア王国は、その東南部を占領して自領に組み込んだ。

引き続き第一次大戦で、オスマン帝国はロシア及びギリシアと再び敵対したが、その末期、一九一七年の二度にわたるロシア革命は、それに乗じたオスマン軍のカフカース進出とも相俟って、在地の友敵関係を流動化させた。小アジア東部からカフカース、そして南ロシアに至る地域は、権力の空白の中、赤軍と白軍、オスマン軍とドイツ軍に加え、在地諸民族が相争う戦場と化す。この間、カフカース屈指の貿易港であるバトゥームは、諸勢力の角逐の場となった。一八七八年のベルリン条約による失地である同県を一九一八年三月のブレスト・リトフスク条約で回復したオスマン帝国は、同年四月にバトゥームを制圧したが、まもなく大戦終結により再度撤退する [Reynolds 2011, Chapters 6-8]。以後、二二年末にソ連の結成主体たるザカフカース・ソヴィエト連邦社会主義共和国の構成国とし

てのグルジアの領土に残されるまで、この街の帰趨は国際政治の争点であり続けた。こうした中、ロシアの新体制を見据え、一九一七年五月から七月にかけて、ティフリス及びバトウームのギリシア人の主唱により、アゾフ海岸ドン河口のタガンログで開催されたのが、「全ギリシア人大会」だった。バトウーム代表のカルフオールは、この際に主導的な役割を担っている。

だが、ロシア、特にカフカースのギリシア人を取り巻く環境は悪化の一途を辿った。「戦勝国」に属したギリシア軍が、講和会議に向けた得点稼ぎのために、反革命干渉の一環としてオデッサに進駐し、しかしまもなくボリシエヴイキの反攻の前に撤収すると、それに伴って現地ギリシア人も逃亡を余儀なくされた。他方、積年のメガリ・イデアの夢を実現すべく、ギリシア軍は一九一九年五月にイズミルに進駐するが、これはムスリムの強い反発を呼び、以後一九二二年まで続くトルコ・ギリシア戦争の幕開けとなる。そしてカフカースでも、新たに誕生したグルジア、アルメニア、アゼルバイジャンという在地の民族国家にロシア人やトルコ人が絡む離合集散が続く中、徐々に民族性に基づく友敵関係が前景化するようになり、在地のギリシア人もまた、自らの利益確保の必要に迫られるようになる。

アナトリアの黒海沿岸から南カフカースに至る地域に、

ギリシア人の民族自決の形で「ポントス共和国」を築く案が浮上したのは、こうした文脈においてだった。だが在地のギリシア人人口の少なさもあって、英仏のみならず、ギリシア王国政府にすらこの案は真剣に考慮されなかったし、しかもこれは、グルジアやアルメニアという在地民族の自決の動きとも衝突するものだった。結局、一九二〇年末に至り、トルコ・ギリシア戦争を指導していたアンカラの大国民議会政府とソヴィエト・ロシアとがカフカース三国を挟撃する形で勢力画定を行なうと、孤立した「ポントス共和国」運動は翌年に解体した [Alexandris 1980]。しかも二二年秋のトルコ・ギリシア戦争の最終的敗北により、小アジアへのギリシアの領土拡張の夢が断たれると、その翌年にはトルコ・ギリシア両国の合意の下に住民交換が行なわれ、小アジアの正教徒は、「祖国」小アジアから切り離されて、その多くの者にとっては異郷に他ならないギリシアに、難民として送り込まれる命運を辿った。

こうした政情の下、カルフオールとスキヤリエリは各々の望む歴史地理像を描いていた。

『バトウームのギリシア人共同体の歴史』

十月革命後の一九一七年末に執筆された本書で、カルフオールはオスマン権力に極めて好意的な評価を下してい

る。特にタンズイマートは、従来、「国家の中の国家を形成していた封建領主のベイたち *ἡγεμόνων ὑπάρχοντων* の恣意を罰しようとする、トルコ政府の初めての試みだった」と見做され、当時バトゥーム市が属していたトラブゾン州の歴代の総督も、タンズイマートが約束した、法の前の平等や信教の自由の実現のために心を砕いた、「自由主義で知られる」ヨーロッパ流の熟慮の人々だったと称賛され、ギリシア人、特にバトゥーム在住の人々も、彼らと良好な関係を結んでいたとされる [Kaltfogous 1918, pp. 7-10]。

これをオスマン権力に対する保険と見做すことは当然可能だろう。だが本書の筆致はそれだけでは説明できない。ロシア治下で書かれた前作でも、また、「全ギリシア人大会」を経て書かれた本作でも、世界総主教座が一貫して重要な行為主体であるのに対し、ロシアやギリシアの政治権力はほとんど登場すらない。本書でカルフオールに関心は、「定住したギリシア人 *Pujatios* は熱心に商売をしたので、彼らの生活は安定し財産も蓄えられるように」なり、そのためにバトゥームには、「故郷から家族を連れた者によって、徐々に小さな共同体が築かれ」たという、この街のギリシア人共同体の由緒にこそ置かれていた。実際、その言語や内容の点で、本書の想定読者がバトゥーム在住のギリシア人なのは明らかだが、その彼らは小アジア、特に

その東北部に縁戚を持ち、トルコ語を解し、商業に従事する人々であることが暗黙の前提とされている。そして、「本書ではこれら同胞のギリシア人をローマ人 *ἡμετέροις* と呼んでおられるが、それは、当時トルコ政府やトルコ人がこの人々をローマ人 *ἡμετέροις* と呼んでいたからであり、公的な書物でもそのように記載されていたからである。トルコ支配期 *Τουρκοκρατίας* のバトゥームの同胞の名望家や資産家は、行政評議会 *μεγάλαι ἱσότης* に加わってその一員として行政に関与しており、それ故に政府高官や強力なベイたちとも関係を持っていた」とも記される [Kaltfogous 1918, pp. 12-13]。

つまり、社会経済的な基盤を踏まえた人的紐帯を重視するカルフオールの立場に変化はなく、カフカースへの移民供給源たる「祖国」小アジアとの繋がりに、オスマン権力に対して彼が有する現実的な認識が結果的に際立つたのだ。現行のオスマン行政区画が議論の前提となり大宰相府と在地の封建領主とが峻別されるのも、また、正教会の管区は必ず明記される一方でスラヴ系諸民族による正教会支配への危惧が余り見られないのも、各権力への忠誠心如何といった問題ではなく、あくまで自らが直接間接に縁を持つ人々の結合、そしてその背景にある社会経済的基盤への関心が卓越したことの帰結なのだと考えられよう。従っ

て、例えばカロリデイのように、ギリシア世界の文明論的な広がりをもその総体として論じ、しかもそれに適した政体を提起するなどという目的は、カルフオールには希薄だった。例え、『小アジア歴史地理』とは異なって、カフカースもの二作ではもはや「オスマン人」は登場せず、歴史の主体として現れるのは「トルコ人 *Toukoi*」に変わり、それに伴ってオスマン時代も「トルコ支配」と呼ばれるようになったとしても、叙述対象となる地域が「祖国」小アジアとカフカースとを往還するカルフオールにおいて、「トルコ支配」概念は、単線的な「ギリシア史」の中で、中世ビザンツと近代ギリシアとの間に挟まれる「暗黒時代」としての用法と同一ではなかった。

では、これと同時期にスキヤリエリが描いた歴史地理は如何なるものだったのだろうか。

「統計戦争」

「ポントス共和国」運動を通じての障害が、在地のギリシア人の少なさだったのが、正にそれ故にこの間、小アジアのギリシア人口を多く見せようとする試みがなされていた。この種の民族分布の操作は、一般に「統計戦争」として知られる。一九世紀後半、西欧列強の使喚の下、オスマン帝国からの分離独立を図る人々は、現地の住民構成にお

ける自民族の多数性をその論拠の一つとしたが、一九〇三年以降、「マケドニア問題」と呼ばれるギリシアとブルガリアとの間の領土争いが激化すると、この双方が自らに都合の良い統計を捏造する中で、「統計戦争」の手法は更に発展する。この経験を踏まえ、大戦中には、人口工学の観点からアナトリアをムスリム・トルコ化し、もって更なる領土喪失を防ごうとする試みが、統一派政府周辺で進められた。いわゆる「アルメニア人虐殺」はその帰結だが、ギリシア人もまた、この際に迫害対象となっていた [Dundar, 2008]。そして大戦終結後、民族自決の教義が広まる中、オスマン領へのその適用を睨んで、統計戦争の舞台は更に拡大する。

ここでは、「ポントス共和国」の主要部と目された、スイヴァス州とトラブゾン州とを例に取ってみよう。次頁の表を見れば、オスマン統計とギリシア側統計との差は一目瞭然である。しかも、ここに反映されていない数値として、一九二〇年刊行のポントス独立を訴える小冊子では、スイヴァス・トラブゾン両州にスイノプ・ジャーニク両県を足した領域について、「ギリシア人生まれのムスリム」が九万四〇〇〇人、「隠れキリスト教徒」が八万五〇〇〇人計上されており、これを足すことでギリシア人の総数は更に膨れ上がる。また、ギリシア人の水増しもさることなが

| | | | | |
|---|--------|---------|---------|----------|
| 1910-12年世界総主教座統計 [Alexandris 1999, p.64] | スイヴァス州 | | トラブゾン州 | |
| | | 内、アマサヤ県 | | 内、ジャーニク県 |
| ギリシア人 | | 28,897 | 298,183 | 118,145 |

| | | | | |
|--|---------|---------|---------|---------|
| 1914年オスマン統計 [Karpaz 1985, pp.178-184] | スイヴァス州 | | トラブゾン州 | ジャーニク県 |
| | | 内、アマサヤ県 | | |
| ギリシア人 | 75,324 | 24,950 | 161,574 | 98,739 |
| ムスリム | 939,735 | 178,639 | 921,128 | 265,950 |

| | | | | |
|---|---------|---------|---------------|--|
| 1920年「ポントス共和国」統計 [Economides 1920, pp.46-47] | スイヴァス州 | | トラブゾン州+ジャーニク県 | |
| | | 内、アマサヤ県 | | |
| ギリシア人 | 154,000 | 55,500 | 523,000 | |
| トルコ人及びタタール人 | 216,000 | 119,000 | 116,000 | |
| ラズ人 | 1,000 | 500 | 220,000 | |
| クルド人 | 33,500 | 15,000 | 40,000 | |
| クズルバシュ | 47,500 | 28,000 | 13,000 | |
| チェルケス人 | 32,000 | 24,000 | 92,000 | |

| | | | |
|--|---------|--|-----------------|
| 1922年スキヤリエリ『小アジアの 諸民族諸人種』 [Scalieris 1922, pp.45-50] | スイヴァス州 | | トラブゾン州(含ジャーニク県) |
| | | | |
| ギリシア人 | 180,000 | | 404,633 |
| トルコ人 | 150,433 | | 188,521 |
| ラズ人 | | | 120,000 |
| サニ人 | | | 180,000 |
| メソハルディニ人 | | | 80,000 |
| コルキス人(ミングレリア人) | 60,000 | | 50,000 |
| イペリア人(グルジア人) | | | 55,000 |
| タタール人 | 20,000 | | |
| クズルバシュ | 279,834 | | |
| ユリュック | 86,000 | | |
| トルコマン人 | 15,000 | | |
| アフシャーレ人 | 25,000 | | |
| チェルケス人及びアフハズ人 | 70,000 | | 79,000 |

ら、目を惹くのは「トルコ人」の少なさである。これは、オスマン統計における「ムスリム」から、あらゆる「非トルコ系」住民を抜き取り、できる限り「トルコ人」を減らす統計操作によって実現した。

このように、あるべき「正しい」在地の民族分布を提示する作業は、それが位置付けられる一定の時空間設定を必要とする。スキヤリエリの議論は、正にそのための営為だった。

『小アジアの諸民族諸人種』

本書は一九二二年六月、「ポントス共和国」運動も崩壊し、小アジア侵攻中のギリシア軍も守勢に立たされて久しい段階で、それに逆らうが如くに、小アジアは何らトルコ人の地ではなく、故に小アジアはトルコの領土とされるべきでないことを説くために刊行された。

例えばトラブゾン州について彼は次のように論じる。「一八八八年のトルコ統計によれば、ギリシア人は一九万三〇〇〇人に達する。毎年、住民百人当たり二人の増加があるので、二六年後、即ち一九一四年には、この数は三二万二八八九人に増加する。だが、一九万三〇〇〇人という住民数は正しいのだろうか？勿論そうではない。それは、トルコ統計におけるキリスト教徒の数を基に正し

い数字を得るためには、元の数の三分の一だけ増加させるべきというルドヴィキ・ド・コンテンソンの法則が示す通りである。従って、一八八八年のギリシア人住民は二五万七三三三人となり、一九一四年には四三万四一八人に増えることになる」と。ここで引用されるコンテンソンの著作は、反イスラーム的な立場からオスマン帝国の民族構成を論じた先駆作であるが〔Contentson 1901〕、こうして西欧学知に依拠する姿勢を示しながら「ギリシア人」の数を水増しした上で、次にスキヤリエリが試みるのが、「ムスリム」の解体だった。彼は、トラブゾン州のムスリムを七つの民族に分類して、オスマン・トルコ人の数をできる限り少なく見積もる。そしてその作業を通じ、新たな史観が紡ぎ出された。

例えば、「コルクス人（ミングレリア人）はギリシア起源、ないしは先ギリシア人であり」、その大部分は今も父祖の地であるカフカースのコルクスに留まっているが、「ロシアの軛を逃れチェルケス人やアブハズ人と共にその縁戚の地、即ち小アジアに移住した」。「フリギア⇨ペラスギ人種に属するラズ人はコルクス人の縁戚であり、ギリシア民族の偉大な闘争にも加わった、ギリシア人の比類なき共闘者だった」が、学校や組織を欠いたためにイスラーム化した。「トラブゾン州のラズ人は、ジャーニク県（ラーズイスタン）

シア起源について強い記憶を持ち、眠ったギリシア民族意識を有している」。また、「ロシアのイベリア（グルジア）征服後にやって来たイベリア人（グルジア人）は、彼らを強制改宗させたオスマン・トルコ人とは何の共通点も持っていない」。そして当のオスマン・トルコ人は、そのほとんどが都市部の役人に過ぎないと。こうした塩梅に、「ムスリム」から多くの非トルコ系民族が括り出され、しかもその多くが実はギリシア起源だったりギリシア意識を持っていたりし、そうした彼らは、顕在的にであれ潜在的にであれ、強い反トルコ感情を有しているのだとされた。その上で結論的にスキヤリエリは、「この地のギリシア性は何世紀も変わることなく存続した。最古のギリシア都市は、ペロポネソスやアッティカやドーリスではなく、カフカースの峡谷や黒海のアナトリア沿岸に見出される」と指摘し、この点は、「誰よりも反ギリシア的なファルメライアー」ですら認めるところだったとも付け加えている〔Scalieri 1922, pp.172-187〕。

本書ではこのような議論が小アジアの各州県について繰り返されるのであり、スキヤリエリは、オスマン統計を一応の出発点としつつ、西欧人の著作を散りばめることで自らの記述の「学術性」を誇示しながら、小アジアの非トル

コ性を論ずることに余念がなかった。彼がオスマン行政区画を用いるのは、単に既存の統計を活用するためという消極的な理由の故に過ぎず、そこには何ら積極的な意義は存在しない。勿論、ラズやチエルケスやアブハズやグルジアがトルコとは異なる民族だとされること自体は異とするに足りない。だが問題は、スキヤリエリが小アジアの非トルコ性を説くのみでは飽き足らず、まずは「ムスリム」から離脱させたこの種の人々につき、更にその「ギリシア起源」を持ち出すことで、小アジアのギリシア性を示す手段として彼らが用いられることにある。しかもその作業は同時に、小アジアのみならず彼らの故地たるカフカースをも視野に入れ、この両地域が共に古代以来のギリシアの地であることを示すものもなつた。小アジアの範囲自体については、スキヤリエリもこれまでの二人とほぼ同じ領域を想定した上で、「これは地理的のみならず歴史のあるいは民族誌的な観点から見ても正しい範囲である。というのは、こうして画定される領域は、歴史的にアジア領ギリシアを形成しており、その内部には古代、ギリシア人の先祖たる完全に純粹なアリア諸民族が住んでいたからである」と、カロリデイのストラボン註釈を引きつつ説いている [Sahlert 1922, p. 9]。このようにスキヤリエリも、小アジアとカフカースとの結び付きを、より広いギリシア世

界の一部分に位置付ける。

「我らが東方」

だが、歴史を持ち出す点で同様に映つても、スキヤリエリの議論は、カロリデイのそれとは似て非なるものであつた。カロリデイは人種ではなく民族を重視し、その民族を形作る要件は言語ではなく宗教だとした。これは、親オスマンの正教会のエキュメニカルな統合を擁護する彼の信条に直結する論点である。だがスキヤリエリにおいては、人種と民族との峻別や言語に対する宗教の優越といった、カロリデイの重視する主張は見出し難い。彼の場合、ほとんどあらゆる属性が、小アジアの非トルコ性、更にはギリシア性を示すという目的を満たすべく総動員されており、ムスリムですら、先史の人種の起源や言語的縁戚関係の故に、「ギリシア人」の中に組み込まれる。その意味で、カロリデイを繁く引用するスキヤリエリが、カロリデイと意図を同じくしているとは見做し難い。その最たる点が、小アジアの歴史におけるムスリム・トルコ人の位置付けだろう。例えばスキヤリエリにとり、「セルジューク朝の急激な発展は専ら異端のギリシア人に負っている」。即ち、オスマン帝国の伸張はビザンツの模倣、ないしはビザンツ旧臣たるギリシア人の力によると見做すオスマン・ネ

オ・ビザンツ論と同様に、ビザンツから逃れた異端のギリシア人こそがセルジューク朝の力の源泉だと見做される [Scalieri 1922, p.330]。これに対しカロリディによれば、「セルジューク・トルコの君主たちは、イスラーム哲学に起因する深い精神的な教養と倫理的な徳とを備えて」おり、それは、内紛に明け暮れるビザンツの頽勢と対比されるものだった [Karolidis 1906, p.21]。そもそもカロリディにとり、トルコ人の小アジア進出は必ずしも否定的に捉えられることではない。彼によれば、「物質文明の創始者であるティグリス・ユーフラテス流域の古代の住民はトゥラン系諸民族だった」のだし、「古代のトゥラン系諸民族の中でも強力な一部族であるトルコ人種は」、六世紀に入るとササン朝という共通の敵に抗すべくビザンツ皇帝と同盟した。即ち、「史上初のギリシア人とトルコ人との邂逅は、友好的な同盟関係だった」とされる [Karolidis 1890, pp.63-64]。つまり、アーリア主義を踏まえたカロリディのギリシア人起源論は、必ずしもトゥラン人種たるトルコ人の蔑視や小アジアの非トルコ性の主張には繋がらない。寧ろ彼にとり、ギリシアの民族性の核が正教にある限り、正教会をオスマン帝国が容認し庇護してきた以上、ムスリム・トルコ人とギリシア正教徒とは、互いに協力して共通の敵「汎スラヴ主義」と闘うべきなのだった。

こうした主張は必ずしも突飛なものではない。トルコ・ギリシア提携論やオスマン・ギリシア二重帝国論はオスマン内外の正教徒に広く浸透していた [Skopetea 1988, pp.309-324]。その興味深いのが、一九二二年のスキヤリエリが、「オスマン国民」理念を繰り返して否定し、この理念の主唱者は、トルコ人と何の関係もない現地住民を「アジア化、トルコ化、トゥラン化しようとしている。つまり、アーリア人種の住民を無益にトゥラン人種に作り変えようとしている」と非難している点だ。ところが「オスマン国民」論の否定に意を用いざるを得ないこと自体、如何に彼がそれを意識していたかを示している。

実際、行政的分権を通じたオスマンの立憲的再生を説いていた一九一一年のスキヤリエリは、「コーラン、より正確にはコーランの教説は、社会に関して他の聖典よりも遙かに民主的な見解を奨励して」おり、ムスリムは古典古代のギリシア哲学を継承する存在であって、メフメト二世は平等に基づく東方帝国の構築を望んでおり、スレイマン大帝がイスラーム法を革新したことはユステイニアヌスがローマ法を革新したことと等しいなどと説き、従って、イスラームや正教の影響力の故にオスマンを見下す西欧人は、「本質的に民主的であって世俗的思想を持たないキリスト

教やイスラームの東方の聖職者と、西方カトリックの聖職者との間に存在する根本的な相違を認識していない」と批判して「[Scalieri 1911, pp.9-14, 23-24]。同じく「西方」や「北方」への対抗心という点は、スキヤリエリとカロリデイとが、その政治的立場の違いを超えて共有するところだったが、正にそこに、その表面的な相違にも拘らず、一九一一年のオスマン再生論と一九二二年の反トルコ論とを統一的に理解する鍵も潜んでいた。即ち、スキヤリエリにおいては、あるべき「東方」の自律的な秩序保全の意識が一貫した一方、それを実現すべき統合の理念やそのための政治手法についての見解は変化した。それは、時々々の政情の変容を反映して変わるものだった。

一九二二年のスキヤリエリは次のように語る。「ロシア人、そしてスラヴ人全般のギリシアやアナトリアへの南下という考えがもたらした恐怖」の故に、「ギリシア人、アルメニア人、チェルケス人、クルド人、そしてその他の人々が、各々の死活の利益のために、スラヴ人よりはトルコ人の方がましだと思つて、後者を選好した」。「彼らは、オスマン国民なる死産した幻想のために労力を費やすことなどなかったが、これが崩壊すれば、様々な形で計画されたスラヴの攻勢の実現が早まると恐れていた。この危険や恐怖が消滅した時、共通の利益から沈黙していた諸民

族は、自らの解放に向けた闘いを力強く推し進めた」。「キリスト教徒であれムスリムであれ、非トルコ系住民は、カフカスまで広がり、北からの攻撃に対する強固な砦となる、東方連邦の形成を求めて」と [Scalieri 1929, pp.337-338]。これは正に語るに落ちたと言ふべきものであろう。反スラヴの自律的な「東方」の秩序を求める点で、オスマン国民論も東方連邦論も、同工異曲のものであった。違ふのは、その主導権を握るのが誰と想定されるのかに過ぎない。実際、前者が「トルコ支配」の隠れ蓑と見做されるのと同様に、当然にも後者はしばしば、「ギリシア支配」の隠れ蓑に過ぎないという批判を受けていた。こうした議論に際してスキヤリエリが無視するのは、実際にはギリシア人が、しばしばオスマン政界で孤立していた事実である [藤波二〇一一、第四章]。

約言すれば、カロリデイとスキヤリエリの二人は、その政治信条の差や現実政治における提携相手の違いにも拘らず、「汎スラヴ主義」に抗する「東方」の自律的な秩序を求める点で、しかもその実現に自ら関与しようとし、それを政党への参加や文筆活動によつて行なおうとした点で、共通していた。その処方箋において、一九一一年と一九二二年の間に、カロリデイの議論は余り変化しなかったが、スキヤリエリの主張は大きく揺れ動いていた。彼

も関与した一九一〇年から一二年の世界総主教座統計と一九二二年の彼の単著とで、「ギリシア人」の定義や数が大きく変化しているのは、この間の政情の変容に伴う、彼の処方箋の変容を反映するものだった。

政体について語るときにカルフオールの語ること

この二人とは異なり、現実の人的紐帯を踏まえた商業的観点を重視するカルフオールの視線は、経済的利害に敏感な在地の正教徒住民の現実の動向に向かう。例えば彼は、「カイセリ管区は現在どの管区よりも貧しいが、それは、この土地が富をもたらさないために、誰もがイスタンブル、イズミル、アダナ、メルスィン、サムスン、バフラヤその他といった商業都市に移住して人口が減少しているののみならず、富裕層すらここに留まらなくなっているためである」と記す [Kalfoglous 1899a, pp.549-550]。住民の実利的関心を直截に示すこのような議論は、人口の多数性なり人種の起源なりに基づく排他的領域性の主張からは程遠い。一九一七年、二月革命後にロシア「全ギリシア人大会」が求めた事項も、この立場の延長線上にあった。

「ロシアのギリシア人の精神状態を示す力を持つカルフオール」は、ギリシア人の心性につき、「主教座の復興は、キリスト教徒のギリシア人、特に地方の住民にとって、本

質的なことである。人心の指導という点で、如何なるプロパガンダや説教も、主教の講話ほどに影響を及ぼすことはできない。我々ギリシア人は、何らかの青写真の下に何らかの提案をするような者がいても、それを受け入れはしないのだが、主教が述べたり提案したりしたことならば、受け入れるのである。（もしそのようなことが本当に可能ならば）奇蹟を行なうギリシア人主教の存在が必要なのである」と表現する。これは、「ロシアのギリシア人は自治を望んだ訳でも、独立した国家や政体を望んだ訳でもなく、教会や教育の自治という基本的な権利を、共同体組織の権利を望んだに過ぎない」という主張とも符合する。彼らが求めたのは非領域的な文化的自治、具体的にはギリシア語典礼の自由、学校運営の自由、ギリシア人主教の自律的な叙任などに過ぎず、それすら独立教会化ではなく、ロシア正教会のシノド管轄下の一種の自治の形で実現可能なものだった。彼らは、「一言で言えば、これまでトルコの同胞に適用されていたのと同様の体制」を求めたに過ぎず、ギリシア王国への併合を望んだ訳ではない。彼らにとってギリシア政府との接触は、ロシアにおける自分たちの権利保障に向けて、講和会議での発言権を確保するための手段に過ぎなかったし [Panayiotidis 1919, pp.24-28]、それが選択されたのも、ギリシア軍のオデッサ進駐とその失

敗によるロシアのギリシア人の難民化という、外在的な出来事の後には過ぎなかった。その期に及んでなお、彼らにとり、ボリシェヴィキの自滅は時間の問題であつて、その後はロシアも常態に復するだろうから、「ロシアのギリシア人の多くはここに留まるだろうし、今は難民となつてゐる人々も、それが可能になれば戻つて来る」のが大前提だつた [Panayiotidis 1919, pp.32-36]。

カルフォールは確かに最終的に「ポントス共和国」運動に加つたが、その中心は、彼の居住したバトゥームではなく、トラブゾンにあつたし、その際も、彼を含む在地の指導層は、ぎりぎりまでアルメニア系なりトルコ系なりの現地住民との連携を模索してゐた。つまり、ボリシェヴィキの敗北後、常態に復したロシアでの生活再建を夢見る彼らにとつて、民族主義の言説への迎合は、ギリシア政府から必要な援助を引き出すための方策の一つに過ぎなかつたし、「ポントス共和国」運動も、いわば友敵関係の宗派主義化の中での窮余の策に等しかつた。

以上から明らかなように、カルフォールには、国家や政体を作り変えようとする意志も、排他的領域性を主張する意図も少ない。故に彼の歴史地理において、統計的な数字には余り重きが置かれぬ。例えば、アマスヤについて彼は、「四万人ほどと推定される人口の内、一〇〇〇人の

みが正教徒」だと記す。またトラブゾンについても、「人口は四万人ほどと推定され、その半分がムスリム、四分の一が正教徒、残りはアルメニア人やその他である」と述べる。自らの父母の地、バフラについては、「一万六〇〇〇人ほどと推定される人口の内、二〇〇〇人ほどがギリシア人 Pouj、一万人がムスリムで残りはアルメニア人とその他である」と記す。そしてカフカース移民の供給源だつたギュムシユハーネについても、「人口は全部で四〇〇〇人ほどと推定され」、「昔はこの周辺では多くの銀山や銅山が採掘されていたので、かつては二万人以上のギリシア人 Pouj 鉱夫が住んでゐたが、その多くはアナトリア内陸部に鉱山を発掘すべく出立したので、二〇〇〇人ほどしかギリシア人 Pouj は残つてゐない」と論ずる [Kalfoglous 1899b, pp.140, 142-143, 146, 151]。彼が提示する数字の慎重しきは印象的である。

カフカースについてはカルフォールはもう少し数字に敏感であり、一八九七年調査に基づく一九〇七年のロシア統計と、自身の独自の集計とを対比しつつ、カフカース各県のギリシア人人口を列挙している。例えば、彼の住むバトゥーム市について、前者が二七三〇人と示すギリシア人人口が後者では三五〇〇人とされ、同市を含むバトゥーム県全体についても、前者では四六九九人のところ、後者では

七一五五人とされている。他のカフカース諸県についても同様の操作がなされるが、その差はせいぜい数百人、最大の誤差でも三〇〇〇人程度であり、カフカース全体のギリシア人も、前者が九万八〇六九人とするところが、後者では一〇万九六一四人に増えている程度の伸びに過ぎない [Kalfoglous 1908, pp.110-126]。スキヤリエリが、カフカースには一九世紀中に二五万程度のギリシア人が小アジアから移住し、大戦中に更に一万人程度が流入した筈であって、これに他地域からの移民やクリミアや南ロシアに定着した人々を合わせれば、ロシアのギリシア人は総計七十七万五三〇〇人に達する筈と述べていることと比べると [Scalieri 1922, pp.411-414]、こゝでもカルフオールの数々の慎ましさは印象的である。そして、スキヤリエリがラズ人やグルジア人を人種的にギリシア人に結び付けたとは異なり、カルフオールにそのような操作は見られない。彼の意図は、ギリシア人が小アジアなりカフカースなりで排他的な多数性を持つと示すところではなく、ギリシア人が越境的に紡ぐ広域的な人的紐帯を示すところにあることであった。

だが、そのような歴史地理像も、その前提となった社会的基盤も、やがて消滅していく。カルフオールの構想を無に帰さしめたのは、ギリシア軍のオデッサ及びイズミルへ

の進駐であり、また、それが引き起こした友敵関係の宗派主義化の中での、ソヴィエト・ロシアとトルコ大国民議会政府とによるカフカース挟撃であった。その後、ロシア、グルジア、アルメニア、ウクライナ、トルコなど、在地に叢生する国民国家が各々の民族史を立ち上げる中、小アジアやカフカースのギリシア人は、そのいずれからも抜け落ちる存在となる。

おわりに

カロリデイの発言は常に学知を背景とした。カルフオールもスキヤリエリも、その立場の違いにも拘らず彼の著作をしばしば引用したのは、正にカロリデイが担う学知の故だった。カロリデイが国際東洋学者会議の常連だったことは、その威信を高める役割を果たしただろう。彼は、一八八九年開催の第八回ストックホルム・クリスチヤニア（オスロ）大会で、オスマン帝国代表のアフメト・ミドハトや、ドイツ留学中だった日本代表の井上哲次郎、そしてアリア主義の提唱者の一人、彼が「熱心な親ギリシア的人物」と見做すマックス・ミュラーらと同席しているが、後の一九一二年、カロリデイが受け入れ側に回った第一六回アテネ大会には、イスタンブル在住のロシア・ムスリム

知識人、ユースフ・アクチュラも参加していた。世紀転換期の学知は既に「西洋」と「東洋」とを結ぶ国際的なものだったのであり、歴史叙述に「科学性」が求められたのも、その皆に共通の事柄だった。

例えばアフメト・ミドハトは、西欧学知を踏まえて、「暗黒の中世」を体现する「最悪の国家」ビザンツを近代の扉を開いたオスマンと対比しつつ [Ursinus 1987]、ヤペテ裔・エサウ裔をめぐる創世記伝承の合理的解釈を通じて、オスマン史叙述の近代的再構築を試みた「小笠原二〇一〇」。その彼は国際東洋学者会議でイスラームやタール人の現状についてロシア知識人と議論していたが [Findley 1999]、タール人たる当のアクチュラは、オスマン・トルコ人に民族主義を広めるのに専心し、帝国解体後は、西欧学知に基づく公定歴史学構築の中心人物の一人となる。それは、アリア主義の裏返しとして、反ソの文脈で戦間期にハンガリーや日本で広がったトゥラン主義のトルコの展開と言うべきものだった「永田二〇〇四」。

ただし、世紀転換期の西洋学知が排他的な人種主義に必ず直結した訳ではない。前述の通り、先史アナトリアのアリア性を説くカロリデイは同時に、先史の人種論が現代の政体論に直結する訳ではないことを強調する。寧ろカロリデイにとっては、国際東洋学者会議第八回大会で「トル

コ人は一人もトゥラン語部会には加わらなかったことが、「ムスリム諸民族にとり唯一の精神生活は宗教的なものであることを示す明瞭な証拠」だと映っていた [Karolidis 1890, p.103]。このような宗教重視の民族論は、ギリシア人にもトルコ人にも等しく適用されるべきものであって、人種の起源に関する学知とは別次元で、「汎スラヴ主義」に抗するオスマン・ギリシア提携を、やはり学知の面から補強するものだった。

そして、本稿で扱った三名の歴史叙述は、領域的主権国家の枠組みと直接は結び付かない点でも共通していた。確かに、カロリデイやスキヤリエリの主張は極めて政治的なものではあった。だがこの二人の議論は、国家権力による紀律を代弁するというよりは、現存する国制や政体それ自体を変えるための営為だった。カルフオールに至っては、政治権力とはほぼ無縁の形で、移民と通商とに基づく跨境的な歴史地理像を描いていた。この三名は、エキュメニズムにもメガリ・イデアにもオスマン国民論にも完全に規定されることはなく、各々がそれらの各要素を再構成することで、独自の歴史地理を紡いでいた。それは、国家や教会に對置される、越境的な社会の側の利害に即した歴史地理認識を、学知を介して昇華させたものだったとも言えよう。だがオスマン帝国の解体後、こうした歴史地理認識の跨境

的な広がり忘れられていく。それに対し、一九二二年のスキヤリエリのような、人口の多数性に基づく排他的領域性の言説こそが後の民族史の語り口に直接繋がっていく。

帝国解体後、ギリシアでは、現有領土の枠内での単線的な民族解放史観が確立した一方、トルコでも、大国民議会政府が実力で確保した地域、即ちアナトリアの一体性に特別な意味が付与されることになり、対外的緊張をもたらしかねない汎テュルク主義に代わるトルコ民族主義の「類型」として、「アナトリア主義」が新たに登場した〔Günar 2013〕。トルコ語話者の正教徒、即ち「カラマンル」は、正教徒のトルコ人だったのかトルコ語話者のギリシア人だったのか二者択一の形で問題となるのも、こうした民族史の時代に特有の発想だった〔Gökürk 2011〕。それは、世紀転換期の思想的営為が、「宗教的」ないし「非政治的」なものから「民族的」ないし「政治的」なものへの、単線的かつ不可逆的な移行過程の中に位置付けられていくことにも繋がる（こうした理解の例として、〔Anestidis 2002, pp. 31–33; Benlisoy 2010, pp. 136–137〕を参照）。

だが世紀転換期の「東方」は、在地の社会経済を織り成す人的紐帯を現実的基盤に、各々の目的や手法の違い、政情に応じた議論の時期的変化はあっても、必ずしも相互に排他的ではない多民族多宗教的な歴史地理認識を生み出し

続けていた。「長い一九世紀」を通じてオスマン経済を支えた正教徒の国際的な通商網も、血縁や地縁に基づく人的紐帯が拡大することで形成されたものだったし〔Harlafis 1996〕、同様の事態は政治権力を担う側にも存在した。帝国各地の名望家層は、帝都が供給する近代学知やそれに基づく法制的枠組みを吸収することで自らの人的紐帯を強化再編し、それを在地での影響力保持のための政治資源としたが、他方で近代オスマンの官僚制は、学歴や地縁を共有するこの種の人々が帝国全土を巡礼することによってこそ成り立っていた〔Roded 1984, Clayer 2005; 秋葉二〇〇五〕。同様のことは、体制を動かすあるいは体制に抗する政党員の間にも人的紐帯についても言える〔Zürcher 1984〕。このように、オスマン領内外において、主権国家の建前の論理に囚われがちな「面」の次元以上に、人的紐帯がもたらす「点」と「線」の集積によってこそ、互いに重なり合う広域的な政治経済の秩序とそれが伴う文化圏とが形作られていたのだった。

以上に鑑みれば、革命前後のオスマン内外の歴史叙述が持つ世界的意義も浮かび上がってこよう。ロシアの一九〇五年革命に発する立憲革命の波は、隣接諸国に立憲主義的で多民族多宗教的な国制再編の課題を突き付け〔Sohrabi 1995〕、それは更に社会主義という対抗文明像を

もたらしましたが、それを担ったのは、域内を跨境的に往還する人々の交流だった [Tungay and Zürcher 1994]。第一次大戦後、両帝国の崩壊を経て、領域的な主権性を求める民族主義が叢生したが、それもまた、かつての越境的な思想の場の中から生み出されたものである [藤波二〇一四 a]。この間、ヴェルサイユ体制に抗する「友邦」として、オスマンに代わったトルコと帝政を継いだソヴィエト・ロシアとが提携するが、戦間期秩序の定着と共に、西欧志向の前者と、対抗文明像に固執する後者とは反目する。冷戦期には、この反目が東西陣営の対峙の形で固定されたため、かつてこの地域を覆った広域的な人的紐帯も抑圧や忘却の対象となったが、冷戦終結後は、超大国の世界支配に抗する地域大国の台頭の文脈で、かつての跨境的な紐帯に新たな関心が寄せられ、その思想的基盤として、正教やイスラームという普遍宗教の復興が見られるようになった。

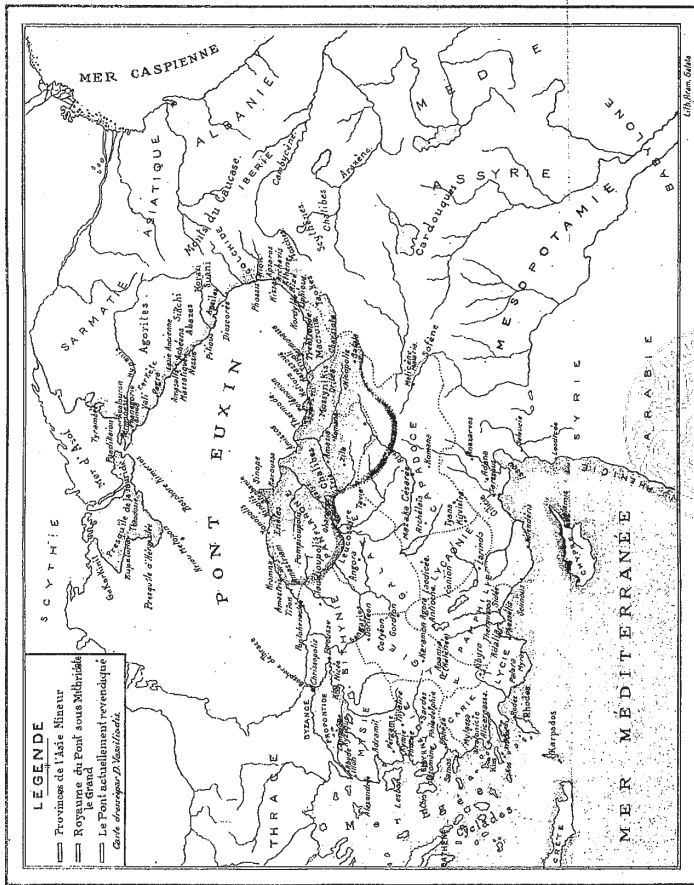
その意味で、西欧学知を踏まえつつも、世紀転換期にオスマン領内外で独自に展開された歴史地理認識の諸相は、民族主義や立憲主義、正教やイスラームという個々の正統性が機能した場としてのみならず、それらが併存して受容され不断的の再解釈を施されていた場自体を対象化する思想的営為として、再宗教化が進みつつある現代世界の視座から見ても、改めて立ち戻って分析するに値する知的遺産を

提供しているように思われる。そして、社会主義という二〇世紀特有の対抗文明像を、それが現実を受容され定着した在地の場の長期的な変動の中に位置付けて理解するためにも、この遺産を歴史学に考察する意義は今なお小さくないと言えるのではないだろうか。

註

(1) ただし、実はファルメライアーにとつて、ペロポネソスとの対比で、トラブゾン¹は相対的に高く評価される地だったことは指摘されねばならないだろう [Skopetea 1999, Chapter 4]。

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究機関研究員)



ギリシア東方の歴史地理—オスマン正教徒の小アジア・カフカース表象 (藤波)

図1 小アジア・カフカース略図 (出典 Economidis 1920)

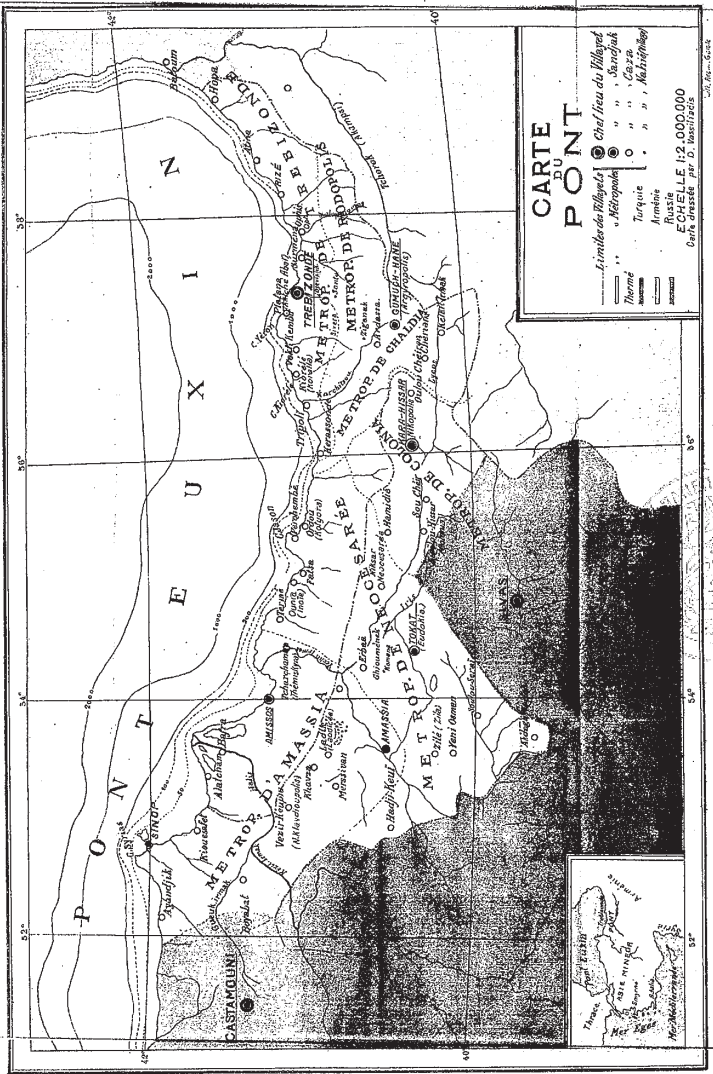


図2 「ポントス共和国」の予定領土 (出典 同)

参考文献

秋葉淳

二〇〇五「オスマン帝国末期イスラーム法官の四類型—
法官組織に見る社会移動」『アジア・アフリカ言語文化研究』
第六九号、六五—九七頁。

石田智子

一九八二「近代ギリシア史学史」『地中海学研究』第五号、
一〇一—一二三頁。

小笠原弘幸

二〇一〇「王家の由緒から国民の由緒へ—近代オスマン
帝国におけるナショナル・ヒストリー形成の一側面」歴史
学会編『由緒の比較史』青木書店、一二五—一五八頁。

永田雄三

二〇〇四「トルコにおける『公定歴史学』の成立—『ト
ルコ史テーゼ』分析の一視点」寺内威太郎ほか『植民地
主義と歴史学—そのまなざしが残したもの』刀水書房、
一〇七—一二三頁。

藤波伸嘉

二〇一〇『オスマン帝国と立憲政—青年トルコ革命にお
ける政治、宗教、共同体』名古屋大学出版会。

二〇一三「オスマンとローマ—近代バルカン史学史再考」

『史学雑誌』第一二二編第六号、五五—八〇頁。

二〇一四 a 「帝国のメディア—専制、革命、立憲政」橋
本伸也・秋葉淳編『近代・イスラームの比較教育社会史—
学校・メディア・帝国』昭和堂（予定）。

二〇一四 b 「宗主権と正教会—世界総主教座の近代とオ
スマン・ギリシア人の歴史叙述」岡本隆司編『宗主権の世
界史—東西アジアの近代と翻訳概念』名古屋大学出版会（予
定）。

Alexandris, Alexis

1980. *Αλέξης Αλεξανδρόβης, «Ἡ ἀνάπτυξη τοῦ ἐθνικοῦ
πνεύματος τῶν Ἑλλήνων τοῦ Πόντου 1918-1922:
Ἑλληνική ἐξωτερικὴ πολιτικὴ καὶ τουρκικὴ ἀντίδραση»*, in
Θάναος Βερέλης and Οἰκονομά Δημητρακόπουλος (eds.),
Μελέτηματα γύρω ἀπὸ τὸν Βενιζέλο καὶ τὴν ἐποχὴ του,
pp.427-474, Ἀθήνα: Στρατιῆς Γ. Φιλανθρωπίας.

1999. "The Greek Census of Anatolia and Thrace (1910-
1912)," in Dimitri Gondicas and Charles Issawi (eds.),
*Ottoman Greeks in the Age of Nationalism: Politics,
Economy, and Society in the Nineteenth Century*,
pp.45-76. Princeton: The Darwin Press.

- Anestidis, Stavros Th.
2002. Στραύρος Θ. Ανεστίδης, «Εισαγωγή», in Ιωάννης Η. Κάρολινους, *Ιστορική γεωγραφία της μικρασιατικής χερσονήσου*, pp. 13–34. Αθήνα: Κέντρο Μικρασιατικών Σπουδών.
- Benlisoý, Stefo
2010. “Education in the Turcophone Orthodox Communities of Anatolia during the Nineteenth Century,” Ph. D. diss., Boğaziçi University.
- Benlisoý, Foti and Stefo Benlisoý
2010. “‘Karamanlılar’, ‘Anadolu Ahalisi’ ve ‘Aşağı Tabakalar’: Türkçü Dilli Anadolu Ortodokslarında Kimlik Algısı,” *Tarih ve Toplum Yeni Yaklaşımlar*, 11, pp. 7–22.
- Clayer, Nathalie
2005. “The Albanian Students of the Mekteb-i Mülkiye: Social Networks and Trends of Thought,” in Elisabeth Özdalga (ed.), *Late Ottoman Society: The Intellectual Legacy*, pp. 289–339, London: Routledge.
- Contenson, Ludovic de
1901. *Chrétiens et musulmans: voyages et études*, Paris: Plon-Nourrit.
- Çınar, Metin
2013. *Anadoluculuk ve Tek Parti CHP’de Sağ Kanat*, İstanbul: İletişim.
- Dündar, Fuat
2008. *Modern Türkiye’nin Şifresi: İttihat ve Terakki’nin Etnisite Mühendisliği (1913–1918)*, İstanbul: İletişim.
- Economidis, D.
1920. *Le Pont et les justes revendications de ses habitants Grecs: étude topographique, ethnographique et historique avec deux cartes géographiques et diverses statistiques*, Constantinople: Imprimerie Française Léandre Mourkidès.
- Ersanlı, Büsra
2003. *İktidar ve Tarih: Türkiye’de “Resmî Tarih” Tezinin Oluşumu (1929–1937)*, İstanbul: İletişim.
- Exertzoglu, Haris
1996. Χάρης Εξερτζόγλου, *Εθνική ταυτότητα στην Κωνσταντινούπολη τον 19ο αιώνα: Ο Ελληνας Φιλολογικός Σύλλογος Κωνσταντινουπόλεως, 1861–1912*, Αθήνα: Νεφέλη.
- Findley, Carter V.
1999. *Ahmed Michat Efendi Avrupa’da*, İstanbul: Tarih

- Vakfi Yurt Yayınları.
- Fujinami, Nobuyoshi
2014. "Hellenizing the Empire through Historiography: Pavlos Karolidis and the Greek Historical Writing in the Late Ottoman Empire," in Dimitrios Stamatopoulos (ed.), *The Balkan Empires: Imperial Imagined Communities in Southeastern Europe (19th–20th c.)*, Leiden: Brill. (forthcoming)
- Gökürk, Gülen
2011. "Bir Siyasi Arkeoloji Örneği Olarak Türkiye'deki Tarih Yazımında Karamanlılar," *Tarih ve Toplum Yeni Yaklaşımlar*, 13, pp.257–276.
- Harlaftis, Gelina
1996. *A History of Greek-Owned Shipping: The Making of an International Tramp Fleet, 1830 to the Present Day*, London: Routledge.
- Kalfoglou, Ioannis I.
- 1899a. 'Ιωάννης Η. Κάλλογλου, Ζητούμενα ἰωάννης Πρόδρομος Μοναστηρῆ γιὰ τὸ Μονὴ Φλαβιανῶν, Ζεῖα, Περσιτζὶ ὄξιαν, [Δερσιάδες: Ἰθακοὶ Μισσηλιῶι Ματτάδαση.
- 1899b. *Μικρὰ Ἀσία κητσηνην ταριχιέ ὄσανραφισή*, Δερσιάδες: Ἰθακοὶ Μισσηλιῶι Ματτάδαση.
1908. *Οἱ Ἕλληνες ἐν Καυκάσω: Ἱστορικὸν δοκίμιον*, Ἀθήνα.
1918. *Ἱστορία τῆς ἐν Βαρούμ Ἑλληνικῆς κοινότητος*, Βαρούμ: Τυπογραφεῖον Σ. Χ. Γαληνοῦ.
- Karolidis, Pavlos
1886. Παύλος Καρολίδης, Σημειώσεις τινὲς περὶ τῆς Μικρασιατῆς Ἀσίας Ομοφυλίας, Ἐν Ἀθήναις: Ἐκ τοῦ Τυπογραφείου τῶν Ἀδελφῶν Περρῆ.
1889. *Στράβωνος Γεωγραφικῶν τὰ περὶ Μικρᾶς Ἀσίας μετὰ σημειώσεων ἐρμηνευτικῶν ὑπὸ Π. Καρολίδου*, Ἐν Ἀθήναις: Ἐκ τοῦ Τυπογραφείου τῶν Ἀδελφῶν Περρῆ.
1890. *Ἀναμνήσεις Σκανδιναυκαί: μετὰ μικρῶν σημειώσεων περὶ τοῦ ἐν Στρογγύλῃ καὶ Χριστιανίᾳ τῷ 1889 συνελθόντος Ἡ' ὀρθοῦς συνεδρίου τῶν δασιολόγων, Ἀθήνησιν*: Ἐκ τοῦ Τυπογραφείου τῶν Ἀδελφῶν Περρῆ.
1906. *Ὁ Αὐτοκράτωρ Διογένης ὁ Ρωμάνος*, Ἐν Ἀθήναις: Σύμλογος πρὸς Διδόσων Ἰφελίμων Βιβλίον.
1909. *Περὶ τῆς ἐθνικῆς καταγωγῆς τῶν Ὀρθοδόξων Χριστιανῶν Συρίας καὶ Παλαιστίνης*, Ἐν Ἀθήναις: Τύπος Π.Δ. Σακελλάριου.
- Karpat, Kemal H.

1985. *Ottoman Population 1830–1914: Demographic and Social Characteristics*, Madison: The University of Wisconsin Press.
- Kitromilides, Paschalis M.
1998. “On the Intellectual Content of Greek Nationalism: Paparrigopoulos, Byzantium and the Great Idea,” in David Ricks and Paul Magdalino (eds.), *Byzantium and the Modern Greek Identity*, pp.25–33, Aldershot.
- Kofof, Evangelos
1986. “Patriarch Joachim III (1878–1884) and the Irredentist Policy of the Greek State,” *Journal of Modern Greek Studies*, 4(2), pp.107–120.
- Koulouri, Christina
1991. *Dimensions idéologiques de l'historicité en Grèce (1834–1914): Les manuels scolaires d'histoire et de géographie*, Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Kushner, David
1977. *The Rise of Turkish Nationalism 1876–1908*, London: Frank Cass.
- Panayiotidis, Theologos G.
1919. Θεολόγος Γ. Παναγιωτίδης, Ο ἐν Ρωσσίᾳ
- ΕΜΗΝΩΜΟΣ, Ἀθήναι: Τύποις Δημήτρ. Χ. Τρεμπέδα.
- Reynolds, Michael A.
2011. *Shattering Empires: The Clash and Collapse of the Ottoman and Russian Empires, 1908–1918*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Roded, Ruth
1984. “Tradition and Change in Syria during the Last Decades of Ottoman Rule: The Urban Elite of Damascus, Aleppo, Homs and Hama, 1876–1918,” Ph. D. diss., University of Denver.
- Scalieri, Georges Cléanthe
1911. *La régénération constitutionnelle: la décentralisation et la réforme administrative*, Constantinople: L’Orient.
1922. Γεώργιος Κλεάνθης Σκαλιέρης, *Λαοὶ καὶ Φυλαὶ τῆς Μικρῆς Ἀσίας: μετὰ πινάκων καὶ χαρτῶν*, Ἐν Ἀθήναις: Τυπογραφεῖον “Τύπος”.
- Skopetea, Elli
1988. “Ἑλλη Σκοπετέα, Τὸ «Πρότυπο Βασίλειο» καὶ ἡ Μεγάλη Ἰδέα: ὄψεις τοῦ ἔθνικου προβλήματος στὴν Ἑλλάδα (1830–1880)», Ἀθήνα: Πολύτυπο.
1999. Φαλαμεράδης: *Τεχνάσματα τοῦ ἀντιπαιδῶ δέους*,

ギリシア東方の歴史地理—オスマン正教徒の小アジア・カフカース表象（藤波）

Αθήνα: Θεμέλιο.

Sohrabi, Nader

Zürcher, Erik Jan

1995. "Historicizing Revolutions: Constitutional Revolutions in the Ottoman Empire, Iran, and

1984. *The Unionist Factor: the Role of the Committee of Union and Progress in the Turkish National Movement, 1905–1926*, Leiden: E.J. Brill.

Russia, 1905–1908," *American Journal of Sociology*, 100(6), pp.1383–1447.

Stamatopoulos, Dimitrios A.

2009. Δημήτριος Α. Σταματόπουλος, *Το Βυζάντιο μετά το έθνος: Το πρόβλημα της συνέχειας στις βαλκανικές ιστοριογραφίες*, Αθήνα: Αλεξάνδρεια.

Strauss, Johann

2002. "Ottomanisme et 'ottomanité.' Le témoignage linguistique," in Hans-Lukas Kieser (ed.), *Aspects of the Political Language in Turkey (19th–20th Centuries)*, pp. 15–39, İstanbul: Isis.

Tunçay, Mete and Erik J. Zürcher (eds.)

1994. *Socialism and Nationalism in the Ottoman Empire 1876–1923*, London: British Academic Press.

Ursinus, Michael

1987. "Der schlechteste Staat: Ahmed Midhat Efendi (1844–1913) on Byzantine Institutions," *Byzantine and Modern Greek Studies*, 11, pp.237–243.

The Historical Geography of the Greek East: Ottoman Orthodox Christians on the Asia Minor and the Caucasus

史苑
(第七四卷第二号)

FUJINAMI, Nobuyoshi

In the nineteenth and early twentieth centuries Ottoman Greek intellectuals constructed a set of peculiar geopolitical images within the framework of the empire as a way to set up a regional order of their own free from the West European as well as the Slavic intervention. Historical writing proved to be one of the most productive methods to bring this kind of imagined geography into effect. In this article I argue the case of three Turcophone Greek intellectuals, namely, Ioannis Kalfoglous, Pavlos Karolidis, and Georgeos Scalieris, and show how historiography worked in the context of identity politics under the multi-ethnic circumstances of the late Ottoman Empire.

Kalfoglous put utmost emphasis on the actual human relations that transcend the borders of sovereign states. When writing the history of the Asia Minor and the Caucasus, he underlined the socio-economic aspects which brought his fellow Greeks from their “fatherland” Asia Minor to the Caucasian towns. In contrast he showed little interest in politics, whether it was conducted in the Ottoman or the Russian Empire.

Karolidis, as a professional historian, took pains to make a distinction between race and ethnicity when he investigated the Arian origin of the peoples of Asia Minor. He thought racial origin did not necessarily determine one’s ethnicity. For him, religion, especially the Orthodox Christianity, is the primal element that creates an ethnic group, namely the Greeks, with a common bondage of religio-cultural belongings. He highly evaluated the role of the Ottomans in this process because they had respected the religious privileges of the Greeks and thus saved the Great Church from the Western Catholic as well as the Slavic invasion.

Scalieris in his turn applied a very different narrative of racism with a specific aim of disclaiming the Turkishness of Asia Minor. He claimed that among the Ottoman Muslims there were so many non-Turk ethnic groups with a supposedly Greek origin that actually the Turks formed only a petty minority while the Greeks and/or “crypto” Greeks were the majority of Asia Minor.

Although sharing the similar ethno-religious background, the ideologies and political inclinations of these three intellectuals differed from one another considerably. Historical writings thus reflected the various types of imagination with regard to the political as well as socio-economic situations of the Greek East stretching from the Ottoman to the Russian territories.